

文学教材としての「羅生門」について

——授業の反省から——

仲田 輝康

「羅生門」の指導では、従来その主題をとらえることや、それを前提にして、作品の表している問題を自分の問題として考えさせることに主眼がおかれる傾向があった。しかし、その過程で重視されてきた下人の心理の変化やエゴイズムのありようが、さほど人の心を打つとは思えないし、それらを中心に読むことが豊かな文学体験を与えることになるとも思えない。文学作品の価値は、それがどれだけ人の心を打つかで決まると言っている。文学の教育でもそのことが基本的視座に据えられなければならない。このような観点から文学教材としての「羅生門」について考察する。

1

現在発行されている平成五年度使用版の国語Ⅰの教科書23種のうち、小説教材として「羅生門」を収録しているものが14種ある。半数以上の教科書に「羅生門」が載っていることになり、その数の多さに改めて驚かされる。現在の日本の高校一年生のうちのかなりの部分が、国語Ⅰの授業で「羅生門」を読んでいることになる。主題について複数の説が提出されているとはいえ、それぞれの説については比較的明確であると思われるこの短編小説であるが、実際に授業をしてみると、案外扱いにくいという感じを持つ教師は多いのではなかろうか。その扱いにくさは、下人の心理をとらえさせることができなかつたとか、主題がうまく説明できなかつたとかいうこととは別のところにあるように思われる。

私も本年度（1992年度）の国語Ⅰの授業で「羅生門」を取り上げた。6月の教育実習期間中だったので、教育実習生と私との協同の授業ということになったが、最後のまとめとして私が担当した時間に、生徒に書かせた感想文がある。「『羅生門』のどのような点におもしろさを感じるか。」という題で書かせたものである。

A（男子生徒） 下人の優柔不断さもあるだろうが、下人は、おかれている立場によって心境が次から次へと変化し、時には全く逆の方向にむいてしまう。また、その時の感情におし流されて衝動的な、とり返しのつかない行動にでてしまうような下人は、心の弱さやもろさなどを持っていると思う。この作品を読んでいくと、心の弱さやもろさを持っているのは下人だけでなく、自分自身もそうなのではないかと考えさせられる。そこにこの作品の面白さがあると感じた。

特に選んだわけではなく、あるクラスの出席番号の一番早い生徒の感想文を抜き出してみたのだが、下人の心理の変化を押さえ、そこから人間の心の弱さを読み取っている。そしてそのことを自分の問題として考え、そこに作品のおもしろさを見いだしている。比較的よくまとまった文章であり、作品の理解・受容のありようとしては一応満足すべきレベルのものであろう。これと同じような内容の感想文は多かったのであるが、これらの感想文を読んでいると、はたしてこれでよかった

のだろうかという思いにとらわれる。何か違和感を感じるのである。作品そのもののおもしろさとこれらの感想文の内容とのずれを感じるとでもいおうか。

ここにもう一つの感想文がある。別のクラスの生徒のものだが、同じ題で書かせたものである。

B（女子生徒） 私にとってはとてもむずかしい作品だった。なぜこの作品が、芥川の代表作の一つとして数えられるか。なぜ当時の人々に多く読まれたか（なおも今、読みつづけられるか）……。

下人の心理描写のすごさなのだろうか。ただ私が、生と死を現実のものとして、とらえられていないから、この作品が理解できなかったのだろうか？下人の心理はすごく手にとる様には分かるが、それ以上の感動は得られなかった。下人の心の中での葛とうがある訳でもなく、ただ平凡な人間を極限にまで追いつめただけ……。それがよかったのだろうか……。生と死、それを現実にとらえること、それができれば、この作品を少しでも理解できるようになるのだろうか？

私にはとても難しい作品だ。

Aの生徒が、「羅生門」には人間の心の弱さやもろさが描かれているとして、そこにこの作品のおもしろさを見いだしているのに対し、「羅生門」が難しいというこのBの生徒は、作品に描かれた内容に対して、「人間って、たしかにそうだなあ。」といったような、人間認識を新たにするような実感を感じることができなかった、いってみればリアリティーを感じる事ができなかった、それを「難しい」というふうに表示しているように思われる。Aの生徒が、人間の弱さやもろさを描いている点におもしろさを感じていること自体はそれでいいとして、その感動に対応するだけの内実を作品が備えているかどうかということ振り返ってみると、Bの生徒の感想には、指導する側が考えなければならない点が含まれているように思われる。

2

国語Ⅰの教科書の過半数に「羅生門」が収録されていることは先に触れたが、このことから、この作品が高校生の小説学習の入門教材として適したものであると考えられていることがわかる。では、その教材としての価値はどのようなところにあると考えられているのであろうか。関口安義氏は『国語教育と読者論』（明治図書、1986. 2）の中で「羅生門」の教材価値について次のように述べておられる。

「羅生門」の教材化の意味、その教材価値はどこに見出せるのか。第一は完成度の高い短編小説だという点にある。四百字詰原稿用紙にして十六枚という長さは、教科書収録作品としては絶好の分量である。しかも四つの部分から成り立つ構成は、がっちりとして破綻がない。虚構の問題を考える上でも適切なのである。

第二に古典と近代文学とを比較するのに、格好の素材だという点にある。（中略）

第三は学習者の問題意識を喚起させ、主体的鑑賞を成立させることが容易な点にある。それは一九一〇年代半ばに書かれた作品が、一九八〇年代の高校生にも多分に訴えるものがあるこ

とを意味する。人間のエゴイズムや生存の意味を考えるのに、「羅生門」はまたとない教材といえる。主人公の心理の変化を克明に追究する中で学習者は自己と他者との関係を省察し、人間存在の実態がどのようなものであるかを考えるきっかけを得るのである。さまざまな主体的鑑賞を討論によって深め、他人の考えを聞く中で自らの批評意識を育てることも可能となる。関口氏は以上の他に、ことばや文章、文体の学習が成立する点をあげておられる。

この関口氏の要約が、「羅生門」の教材価値に関する考え方を代表していると言えるであろうが、ここでは、短編として見事に構成された完成度の高い作品であると考えられているということ、そして、その内容として高校生に考えさせるにふさわしい問題を提起していると考えられているということ、この二点を確認しておきたい。

授業で扱う時のねらいも、当然それに即して考えられるわけだが、実際の教科書での扱いはどうなっているのか。教科書の「学習の手引き」と本文の下段等についている設問を拾いあげてみた。今回調査しえたのは、「羅生門」を取り上げている14種のうちの12種であるが、それらに共通する事柄をあげると次のようになる。

- | | |
|--------------------------------------|--------|
| 1 作品の構成を考える。(時刻や場面の展開に注意して段落にわける。) | 11/12 |
| 2 下人の心理の変化を整理する。 | 12/12 |
| 3 描写や比喻などの表現に注意する。 | 12/12 |
| 4 老婆の論理をおさえる。 | 11/12 |
| 5 下人の勇気の内容を考える。 | 10/12 |
| 6 「下人の行方はだれも知らない。」という一文の表現効果について考える。 | 9/12 |
| 7 主題を考える。 | 9/12 |
| (ただし、これを幅広くとれば) | 11/12) |

この他の細かい質問についても共通点は多くあり、また逆にそれぞれに工夫のこらされている点もあるのだが、核となる質問をとりあげてみると、予想されたこととはいえ、ほぼ共通していることがわかる。

まず、1) 時刻や場面に注意して作品の構成を考え、次に、2) それに従って下人の心理を整理し、3) 老婆の論理をおさえ、4) 下人の勇気の内容を考える。そして、5) 末尾の一文の表現効果を考え、最後に、6) 作品の主題について考える。

これを見ると、作品に描かれている内容を整理し、それにもとづいて、作品が全体として描こうとしたこと、つまり主題を考えるという方向での読みが基本軸になっていることがわかる。私自身もこれまではだいたいこの流れに沿って授業を進めてきたし、一般的にもそのように扱われることが多いように思われる。これに、人間のエゴイズム等の問題を自分の問題として考えるという発展学習が付け加わることもあるが、ともかく、作品を読むこと自体は、内容を整理し主題を考えるという方向が基本になると言えるであろう。

ところで、授業の中で主題を追究するということは、作品を読んでいくうえでどのような意味を持っているのだろうか。主題を追究することについて山田有策氏は、その教育的価値は認めつつも、「走れメロス」を例にあげながら次のように言われる。(「^{テーマ}〈主題〉なるものへの反逆」『月刊国

語教育』1990. 5)

かりに教師が〈主題〉の抽出を課題として生徒に課したとしたら、恐らく彼らは「信実の美しさ」とか「愛と誠の力」といった言葉を作品内部の言葉を利用して答えるのであろう。むしろ、そうした行為じたいは教育の一つとして決して無効ではない。具体的な作品世界から概念としての〈主題〉を抽象化する行為はきわめて重要だからである。いつまでも具体的なディテールの世界だけにとどまり、抽象化という行為の世界に飛翔できないとしたら、人間としての豊かさに欠けることにもなりかねないのだ。だから、具体から抽象へという一つの精神の伸張をトレーニングする方法として〈主題〉化をセッティングすることは教育としてはありうるのだ。しかし、そのことのためだけに文学作品を材料とするのだとしたら、文学の魅力を消滅させてしまう危険性があると言わざるを得ない。繰り返すことになるが、文学作品はやはりそれ自体の面白さを読む行為によって発見していく場としていきたいのである。

ここで氏が言われているのと同じことが、「羅生門」の指導にも言えるのではないだろうか。

「羅生門」は内容の展開が明確で整理しやすい。また、主題についてみても、複数の説があっどこに比重をおいて読むかという問題はあるにしても、「人間のエゴイズム」であれ、「人間の心の不定性」であれ、それぞれは内容から比較的容易に抽出しやすい。それだけに、授業の中でも主題を追究することに力点が置かれがちであると言えよう。

しかしあらためて言うまでもないことだが、文学作品は読み解くために存在しているのではないし、概念的な主題を抽出するために存在しているのでもない。それらはそれぞれに重要なことではあるが、文学作品においては、それがどれだけ人の心を打つかということがその最も重要な存在意義としてある。その作品がどれだけおもしろいか、それにどれだけ心を動かされるかということが、その人間にとってのその作品の存在価値を決めると言っていいたいだろう。作品を読み解くのも主題を追究するのも、あくまで感動の幅を広げ、質を深めるためである。芥川文学の魅力はそこにかもし出される情緒や気分にあるとして、「テーマを発見すること、テーマの意義を論ずることだけでは芥川の思想批判となるだけでおわり、その文学自体はとり残される。」（『芥川龍之介——抒情の美学——』大修館書店、1982. 11）という平岡敏夫氏の指摘もあるが、問題は「羅生門」の主題追究が、作品のおもしろさ、作品の与える感動とどう結びつくかということであろう。

3

たしかに「羅生門」にはエゴイスティックな人間が描かれている。とくに下人と老婆とのやり取りの場面では、人間という存在の本来的にエゴイスティックなありようが示されている。しかし、そこで提示された人間認識が我々の共感を呼び、心を動かすというふうにはなりにくいのではないだろうか。エゴイズムのドラマとしてみた場合、リアリティーに欠けるように思われるのである。エゴイズムの問題が、作品の展開を通じて論理的に突き詰められているというわけではないし、下人と老婆との対決の場面にしても、この場面のリアリティーを支えるはずのそれまでの下人の心理のドラマが、どこか作りものじみているという感じがするのである。人物がその内包する論理によ

って必然的に自己展開するというふうにはなっておらず、あらかじめ作者によって計算された作品展開に則って描かれているだけで、人形のごとく動かされているような感じを与えられる。「六分の恐怖と四分の好奇心」と下人の心理を分析してみせるあたりや、「この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の木切れのように、勢いよく燃え上がりだしていたのである。」といった比喩のあたりでも、言葉自体が浮き上がってしまい、ある雰囲気をかもし出してはいるが、いかにも作りもののめいている。

同じことは、対する老婆にも言える。よく引かれる「猿のような」とか、「肉食鳥のような」とかの動物を用いた比喩も、気味の悪い雰囲気だけはよくは表されているが、表現に対応する人物の実態を曖昧にして、雰囲気の中に解消してしまう。この二人が対決しても、そこに生の人間のドラマが現出するわけもなく、したがってそこに人間認識の深まりが展開されるはずもない。そこに描かれているのは、人間のありようのなにか不気味な雰囲気であると言ってよかろう。

また、羅生門の上で、死人から髪を抜き取っている老婆を見つけた下人は、老婆に対して「はげしい憎悪」、「あらゆる悪に対する反感」を感じる。「下人にとってはこの雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くということが、それだけで既に許すべからざる悪であった。」というのだが、「この雨の夜に、この羅生門の上で」という限定の加えられたこの判断は、倫理的な善悪の判断とは範疇を異にする、むしろ美学的判断とでも言うべきものである。この後で老婆の答えの平凡なのに失望するのも同じことであろう。ここで下人は老婆の答えになぜ失望したのか。それはおそらく悪の美的完成を期待していたにもかかわらず、それが裏切られたからであろう。

ともかく、老婆と下人の対決の場面でも、老婆のエゴイズムの論理と下人のエゴイズムの論理とがぶつかりあってドラマが進展していくというふうにはなっていないし、また生きていくためには何をしていいのかといったふうな倫理的な突き詰めがなされているわけでもない。いってみれば「羅生門」の作者は、人間のエゴイズムや悪の問題を倫理的に突き詰めることを放棄し、それを詩的な美の世界に閉じ込めてしまっているといえるだろう。「人間の心の不定性を究極的に『黒洞々』という詩情でまとめあげ」（「創造主体と言語——芥川龍之介を中心に——」『国文学』昭和46. 5）たという磯貝英夫氏の指摘もあるが、その詩的美の世界のクライマックスが、末尾の一文を含めての最後の場面であろう。

この部分は楼の上の死骸を描写した場面とともに、この作品で最もリアリティーの感じられる場面である。ここにはより強大なエゴに敗北した老婆の絶望感が描かれているが、その絶望感は、醜悪な人間に対する我々の暗澹たる気持ちを代弁するものであり、それはさらに作者自身のものでもあったと言ってもいいだろう。作品の中で作者の肉声らしきものが聞こえる唯一の部分である。その作者の思いがこの部分のリアリティーを支えていると言ってもいい。「羅生門」を支えるおもしろさはここらあたりにある。

従来から指摘されてきたように、「羅生門」はテーマ小説としては底の浅いところがあり、テーマを中心に読み取らせても浅い文学体験しかもたらさないように思われる。むしろ文学作品としての魅力は、最後の場面でふと漏らされた芥川の悲しみ、詩的に表出されたその暗澹たる思いにあると言っていいであろう。それに我々は心を動かされるのである。ここを押さえなければ、「羅生

門」での読みは文学的に豊かなものにはならないのではないかと、私は思っている。しかし、作品の構成が整然としているだけに、授業は下人の心理の変化など、内容を整理して主題を考えていくという方向に流れがちで、それでなくとも、とにかく生徒は表現よりも書いてある事柄にばかり目を向けがちなのに、そのように整理していくと、ますます事柄の方に目を向けてしまい、結果として、作品が本来我々に訴えかけてくるところから離れてしまうのではないだろうか。

4

では授業の中でどのような工夫が考えられるだろうか。そのことを考える前に実際の授業について振り返って見る。

先にも触れたが、今年度の国語Ⅰの授業で「羅生門」を扱った。教育実習生との協同の授業であったが、実習生は細かな表現にも目を配って授業の中で色々と工夫をした。しかし基本的には、場面・時間を中心に構成を押さえ、下人の心理の変化を整理し、老婆のエゴイズムの論理を押さえる、というオーソドックスな授業展開をしてもらった。その後、私が担当して、末尾の一文が作品全体の中でのような働きをしているかを生徒に考えさせた。下にその時の4年（高1）C組での板書と授業の内容を簡単にあげておく。生徒が出した意見をそのまま順番に板書していったので、生徒がその部分をどのように受け止めていったかがわかってもらえると思う。（ ）も板書した事項である。

〈板書〉

「下人の行方は、だれも知らない。」

作品全体で、どのような働きをしているか。

（作品全体に、どのような意味を与えているか。）

- ・下人のこの後の運命（盗人か飢え死にか）をはっきりと言わず、読者に想像させる。
- ・読者に考えさせる。
- ・作品世界をより暗くし、下人の悪を強調している。
- ・絶望的な雰囲気強調している。
- ・盗人になると書いたらおもしろくなる。
（ストーリーの必然性をこわす。）
- ・下人が心がわりするかもしれない。
- ・誰もいなくなって、非常に暗い世界になる。
- ・むなしさを感じる。

ここで次のように質問してみた。

T. この一文があることによって、絶望とむなしさを感じるという意見が出ましたが、それをもう少し説明してください。

S 1. 人間の自分勝手さ、エゴイズムに絶望を感じている。

S 2. 作者の人間に対する絶望が感じられる。

ほぼ出るべき意見が出たようであったし、生徒にみずから考えさせるためには、こういう場合私の意見は言わないほうが良いと思っているので、「なるほど、そんなふう感じたのですね。」と確認して、この時間は終わった。

この授業を受けて、次の第7時、まとめとして、「『羅生門』のどのような点におもしろさを感じるか。」という題で感想文を書かせたわけであるが、しかし、多くの生徒たちは、最後の部分には触れず、冒頭にあげたAの男子生徒のように、下人の心のもろさやエゴイズムの問題など、下人の心理についてあげていた。ちなみに下人の心理についてあげていた生徒は45名中40名であった。45名のうち、なんらかのかたちで結末部分に触れていたのは12名であったが、それも「下人のその後を想像させておもしろい。」という内容のものが多かった。中に次のような感想文があった。

C (男子生徒) 主人公の気持ちがころころ変化して、結局「悪」へ転がりこんだことについて、とてもむなしさを感じた。この感覚がこの小説のおもしろみを出していると思う。僕は最後の一行から、一人の人間の心の営みまでも、時代や社会の大きな流れに巻きこまれる、というような印象をもち、又そこに人間の非力さとか、むなしさを感じた。下人と老婆のやりとりの間ですら、「外にはただ黒洞々たる夜があるばかりである。」という表現は、特にそのむなしさを、強調しているように思えた。そういったふうの一つ一つの表現に深い意味が隠されているような書き方も、この小説のおもしろいところの一つだと思う。

この生徒は最後の場面の表現から、人間の非力さ、むなしさを感じており、作品が表現を通じて訴えかけているものをよくとらえていると言えよう。しかし、この感想文のような例は稀であった。その意味では、最後の場面の効果を考えさせることを通じてこの作品の文学的魅力をとらえさせるというねらいはほとんど達成されなかった。この時間の中での指導法の不十分さはあるにしても、作品の構成を考え、心理の変化を整理するという学習過程の中で、生徒の目が次第に書いてある事柄の方に向いていってしまったのではないかと思う。たしかに「羅生門」にはストーリー展開のおもしろさも含めて、書いてある事柄のおもしろさがある。しかし、事柄のおもしろさがわかるだけでは、「羅生門」の文学体験としては不十分である。

ところで先に引用した平岡敏夫氏は、同じ著書の中で次のように言われる。

冒頭の羅生門という舞台からはじまる「異常なる事件」——、暗闇の羅生門楼上にうごめく「^{ひはだ}檜皮色の着物を着た、背の低い、痩せた、白髪頭の、猿のやうな老婆」が死人の長い髪を抜きとっている、そのたいまつのみ。こうした「異常なる物」が雰囲気となってひろがっている。老婆にたたみかける五つの修飾語を見ても、その情緒的な雰囲気の形象に力を集中し、そこに「抒情」を成立せしめている作者を感じとることができよう。

氏はこのように述べて、このような不気味な雰囲気がこの作品の魅力の中心であると言われる。

実は、生徒が書いた初発の感想文でも半数以上の生徒が作品の不気味さに触れていたのである。

たとえば冒頭にあげたBの女子生徒は次のように書いている。

B “恐ろしい”これがこの話でもった印象だ。下人の心理変化が、恐ろしかった。でも、その下人の心理変化を理解できることが一番“恐ろしい”と思ったのかもしれない。

この話のもつふん^(ママ)意気自体独特で、とても不気味だ。この作品で一番惹かれるところといえば、このふん意気だ。でも私はあまり、こういう話は好きではない。多くの芥川ファンの人達は、このふん意気に惹かれるのだろうか……？

授業をしていた当初は、このような感想を生かすことに思い至らなかったのだが、今振り返ってみて、ここから出発すべきではなかったかと思っている。ここから切り込むことによって、事柄を中心に読んでいくのではなく、作品のおもしろさを中心に読んでいくことができたのではないだろうか。

たとえば「どういうところから不気味さを感じるのか。」と尋ねれば、おそらく、鴉の描写や動物的な比喻表現、死骸の場面をあげるであろう。やがて羅生門という状況設定そのものもあがってくるかもしれないし、さらに人間の醜さそのものかもし出す不気味さをあげる生徒がいるかもしれない。内容の確認として、下人の心理の変化を整理したり老婆の論理を確かめたりといった学習は必要であろうが、それも以上のことを踏まえて整理していけば、事柄ばかりにとられることを免れるのではないだろうか。これらの学習を踏まえて最後の場面にもっていく。最後の場面の発問についてもこうすればよかったと反省する点があるのだが、それは今は措く。

ともかくこうした授業展開によって、主題を抽出するための学習ではなく、作品のおもしろさを発見し、実感することを中心に据えた学習をすべきだったと思っている。文学作品である以上、どこにその作品のおもしろさを見いだすかは個々の読者によって違うのは当然であり、そのことは授業の中でも認めていかなければならない。最終的に生徒たちが「羅生門」の最後の場面にこの作品の文学的おもしろさを見いだすかどうかはわからない。そこらあたりに「羅生門」の文学体験の難しさがある。しかし、遠回りに見えても、おもしろさを見いだすことから始めることが、生徒のより豊かな文学体験につながっていくのではないだろうか。